

# 奥出雲の仁王門を復元する

## 〜オランダ人彫刻家と奥出雲市民の心を受けて〜

### ブルー仁王誕生物語

話は10年ほど前、オランダのアムステルダム国立美術館に日本の中世の仁王像が展示されたところから始まる。この像の虜になつたオランダ人女性彫刻家のイエツケ・ファン・ローンは、美術館に展示される美術品としての仁王に違和感を覚える。仁王は山里の人たちとともに信仰の中に立っているはずのものだと。思いがつのり、かつて仁王が立っていた島根県奥出雲の岩屋寺を訪ねる。空になつた仁王門の前に、この里の人たちに仁王を返そうと決意、オランダの伝統のデルフト焼きで原寸大の仁王をタイルに焼くことを思いつく。アムステルダムと奥出雲の市民に呼びかけ、等身大の仁王のデッサンをもとに15cm角のタイルに焼く「いっしょに共に」の共同制作により、540枚のタイルからなるブルー仁王が完成した。現在、奥出雲横田の本町会館に陳列されている。屋根も崩れて廃墟となつている仁王門を修復し、このブルー仁王を納めたいと言う。

(一連の詳細は2024年3月11日の朝日新聞GLOBE+に掲載されたゆい・きよみによる記事のほか、いくつかのYouTube動画で紹介されている)



イエツケ・ファン・ローンとブルー仁王

### イエツケが訪ねてきた

2023年5月、学生と実習していた東山五条の町家改修現場にイエツケがやってきた。彼女は京都のアニエール・ギャラリーにレジデントとして活動していた。現場で奥出雲の話や聞き、感銘を受けた。たまたま美術館で出会った彫刻に、感動し、疑問を感じたにしても、遠くはるかな極東の山奥の地を訪ねるだろうか。そして長年、仁王を擁していた奥出雲の人たちのために数年間そこまでの活動を続けられるものか。何が彼女を動かしているのだろうか。それはわからない。ただ、そんな彼女や支援しているアムステルダムの人たちの思いに日本人として応えたいではないか。できることはなんでもしようと思つた。これから関空に向かい、オランダに帰ると言うイエツケを見送つた。

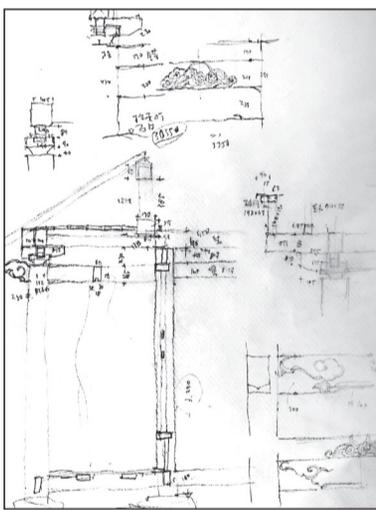
### 奥出雲出身の学生がいた

11月、イエツケは再び京都に。奥出雲で行われる地元放送局主催の仁王フェスティバル企画で来日したとのこと。ちょうど学校に奥出雲出身の学生A君がいた。聞けば、イエツケのこと、ブルー仁王のことも知っていると。なんとという偶然！しかも父親は京都の社寺建築会社で修行した大工という。さっそくイエツケと対面、奥出雲のA君の父親と連絡を取ることになった。父親大工氏は、一度話をしたいので、私に奥出雲に来て欲しいと。

### 奥出雲岩屋寺仁王門

12月末、奥出雲に行つた。幸いにも雪深いはずの奥出雲に雪がなかった。京都から車を走らせ、山道を避けて安来経由で奥出雲横田に入り、岩屋寺仁王門に到着。およそ5時間。現場にてイエツケの活動を支援する現地の人たちと会う。

だんの仁王門はかなりくたびれていて、屋根は落ち、ロープで支えられてどうにか立っていた。7寸角の柱のほとんどの根本が腐っている。これだけ歪んでいるところを見ると、梁の仕口もかなりやられていたのだろう。思つたよりも小さい。間口2.5間、奥行1.5間、12本の角柱からなる八脚門。彫り物の雰囲気からしても中世には遊れない。屋根はもとものものではない。この程度なら学生たちでも頑張ればなんとか復元できるのではないか。奥出雲出身のA君に手伝ってもらいながら、実測図を作成した。



実測のスケッチ

### ブルー仁王

横田の街中に本町通りがある。落ち着い



本町会館のブルー仁王

た商店家屋が立ち並ぶ中に教会の塔が見える。ブルー仁王はその中ほどのかつての銀行建物という本町会館に展示されていた。阿吽2体の正面と背面合計4面のブルー仁王の仁王だ。

聞けば、イエツケの情熱に引かれて町を挙げてなされたブルー仁王がどうにか出来上がり、コミュニティセンターに展示されていたのだが、2年で放り出されるといふことに。町の有志たちが改装費用を出し合い、この会館に納めたという。横田を訪れる人はここでブルー仁王を見て、オランダに渡つた岩屋寺の仁王の物語を知ることができる。中心部から離れた山の中よりもブルー仁王の居場所としてふさわしいと考えていると。

### 奥出雲ふるさとおこしを

その晩、イエツケによる一連の運動を支援してきたサポーターたちが集まって交流会となつた。みなさん70を超えた方々ばかりである。近頃は若い者は他所に出てしまひ、残つても家族中心で休日はどこかに遊びに行き、地域の行事にはあまり出て来ない。近年、地域の世代間の隔たりは日本中いたるところで問題になっている。

島根県と言え、出雲大社をはじめ松江城、不昧公の茶室がまず思い浮かべられる。石見銀山も世界遺産に登録されて多くの人が観光に訪れている。足立美術館の庭園も玉造温泉、皆生温泉とともに一大観光名所となつている。私も昔から幾度も訪れているが、奥出雲は知らなかった。来てみれば、たたら里であり、出雲そばの里であり、ひなびた温泉宿もある。その前に、出雲の地を流れる斐伊川の源流にある船通山は素戔嗚尊と八岐大蛇伝説の地である。この地のたたら製鉄から出てくる大量の土砂は棚田の風景を形成し、質の良い仁田米を産している。花崗岩ゆかりのよい水があり、いい米があることから美味い酒もある。子どもの時から図鑑で知っている鬼の舌震の奇景もある。雲州そろばんもある。観光資源にこれほど恵まれている地はなかなかない。にもかかわらず知られていない。ということは観光の地として今後の伸び代がかなり見込まれる。ぜひとも観光政策に力を入れるべきである。その際に、岩屋寺とブ

ルー仁王の物語は地域の歴史や文化を愛する地域の人々の心を示す格好のストーリーとなるに違いない。



夜遅くまで地元の支援者たちと話し合った

### 解体に向かう

4月下旬、学生たちチームと指導の山口保棟梁と一緒に再び奥出雲に向かった。解体前の仁王門を見ておくこと、解体の手伝いが目的である。到着の前に、地元の人たちで解体の儀式が行われていた。長年、京都府文化財保護課で文化財建物を修理してきた棟梁は、仁王門を見るなり、修復して復元するにはもう手遅れだとなつてく。

その晩、宿で催された夕食会で、棟梁は無理に復元するよりも、イエツケのブルー仁王を納めるには別の新たな設計の門の方がいいのではないかと発言。一同、動揺する。が、それは解体に集まった大工たちのみならず、接合部がごとく腐朽している柱や梁を目の当たりにして、その場に居合わせた多くの人たちもそう感じたことだろう。

ただ、屋根を解体して柱梁だけの姿には一種の廃墟の美というべき尊厳な美しさが漂っていた。このまま置いておきたいと思つた。イエツケもおそらくそう思っていたらう。



解体前の仁王門と学生たち

### イエツケのスピーチ

解体の後、本町会館にて交流会が行われた。町長はじめ4、50人の人たちが集まっていた。そこでなされたイエツケのスピーチは感動的なものだった。数年「いっしょに共に」を掲げて活動を行ってきた彼女は、2015年に初めて仁王門を訪れた折の写真を「何も無い E mp t i n e s s」、解体されて礎石だけの写真を「満たされている F u l l i n e s s」とした。逆ではない。かつて誰一人関心を寄せていなかった仁王門に対して、今、ここに集まった人たちが埋まった会場のように、満たされている。解体前のお祓いに、解体工事に参加してくれた人たち、会場に集まってくれた人たちの熱い思いで礎石以外は空ろのはずの仁王門が満たされている。

### 古材による復元は無理

解体された仁王門の部材は翌日、学校に届けられた。ここからは学生チームの仕事である。あらためて眺めると、ほとんどの材が腐っていてそのままでは再利用ができない。山口棟梁の指示で、とりあえず、一つ一つの部材の状態を記録する作業を行った。これを新材で補い、つぎはぎだらけの仁王門を復元するという

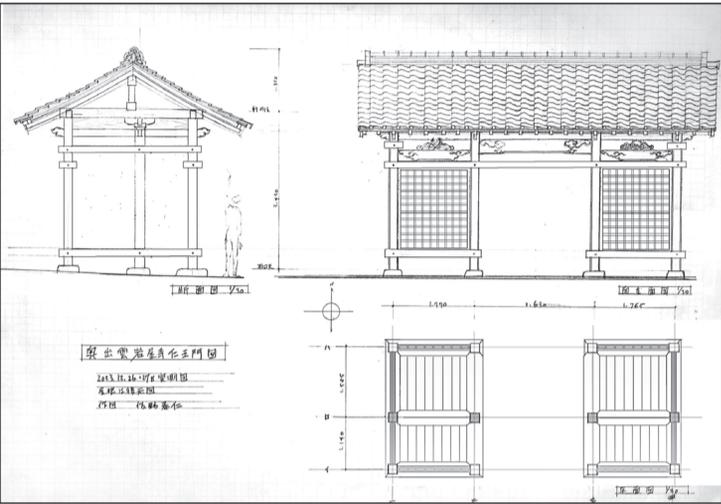


虹梁の記録を採る学生たち

兼ねてからの構想は棟梁に否定された。学生たちの力量ではとても無理、3年ばかりかかるだろう。いい加減な修復は仁王門のためにも、学生たちの将来のためにもよろしくない。となれば、新たな仁王門を設計、建築するしかない。

### 復元の提案

第一案として、礎石をそのままにし、高さを元の寸法を守って、あらたな構造の門をつくる。ブルー仁王を納め、元の古材をいくつかそのままの状態で展示する。あらたな門は両脇をコの字型に壁で囲み、いわば内部空間を設け、タイトルの仁王を展示する。二次元的なブルー仁王にはその方が合うのではないかと考えた。しかし、そもそもイエツケはア



復元案 古材の柱列を中央に立て、長押で前後の新材柱に結ぶ

### 仁王門復元の意味

ここでもう一度このプロジェクトの意味を考えたい。すでに岩屋寺は仏教寺院であることをやめ、遺構が存在するに過ぎない。イエツケが仁王を再度、奥出雲の山に返したいことの意味は、単にオランダに渡った仁王の代理ではない。600年の間奥出雲の人たちを見守ってきた仁王という存在をもう一度、地域の人たちに思い返してほしいという願いが込められている。奥出雲の地は観光資源の宝庫であることは先に述べた。しかしそれは人工流出を防ぐに有効な経済活動の話であって、奥出雲のひとたちがこの地に住むということ、住みたいと思うそのことは、ひとりひとりの生きざまがいかにその地域の自然や風景、人々との生きた交流に関わってきたものであるか、一言で言えば、故郷の自覚によるのだ。イエツケが大事にしたいものはそこにある。それはブルー仁王や仁王門ではない。それは所産に過ぎない。大事なのはそれらをつくらうと人々が集い、みんなが「いっしょに共に」手をかけて共同でひとつのものを創り出すことで生まれる連帯感という手応えとも言えるだろうか。そしてその連帯感と同じ時代の人々だけではなく、先祖代々の地で生きてきた先人たちの連帯感もある。ブルー仁王や仁王門もそういう存在となって欲しいのである。

ムステルダム国立美術館の仁王像がほかの美術品と同様に「展示」されてあるあり方に疑問を感じてここに至っている。イエツケは、仁王を展示品として扱って欲しくないのだ。あくまでも展示館ではなく、仁王門として設計してほしいと願っているにちがいない。

第二案は、かつての古材を部分的に補修して4本、一軸のみ中央に立てて、それを前後からサポートするように新材の柱と古代長押で繋ぎ合わせるもの。両妻面は土壁で、桁方向は耐震格子で考えよう。仁王が望めるように細い格子で耐震性能を確保する。

### ~ profile ~

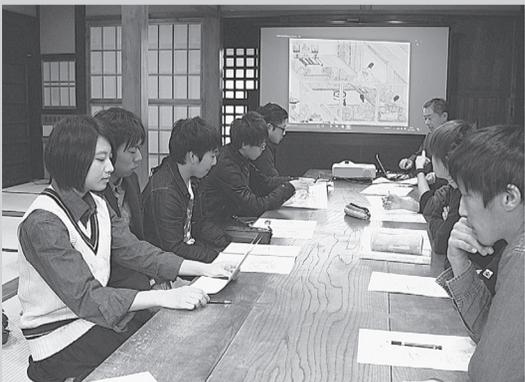
#### 佐野春仁 (さの はるひと)

昭和29年生れ。京大建築学科卒、同大学院修了、ボーデン・パウ建築研究所設立。現在、京都建築専門学校校長、同よしまち町家研究室代表。現職のほか財団法人啓明社理事、「京北の木で家をつくらう」ネットワーク副代表。



## 建築の基礎を学び、さらに伝統建築・木造建築も学ぶ

ただいま  
2025年度生募集集中



よしまち町家校舎でのゼミ風景

- 建築教育70年以上の実績を誇る伝統校
- 一級・二級建築士 卒業後すぐ受験可能  
※二級は合格後すぐ、一級は実務経験4年で免許登録。
- 卒業後は、建築士、現場管理、大工(寺社・住宅)、そしてリノベーション・デザイナー

■ 建築科 <昼間>	工業専門課程	2年制	男女60名
■ 建築科二部 <夜間>	工業専門課程	2年制	男女60名
■ 伝統建築研究科 <夜間>	研究課程		男女15名



その学びは、人生を築く。  
学校法人 京都建築学園  
**京都建築専門学校**

〒602-8044 京都市上京区下立売通堀川東入ル東橋詰町174  
TEL 075-441-1141 <https://kyotokenchiku.ac.jp>  
E-mail info@kyotokenchiku.ac.jp